

## 文芸批評家佐伯彰一の変貌と断念

国際ファッション専門職大学  
大貫 徹

### 要旨

戦後日本を代表する文芸批評家佐伯彰一（1922—2016）は、1960年代後半から1970年代前半という10年間に、文芸批評家として決定的とも言える「変貌と断念」を経験した。この変貌と断念はまったく別物というわけではない。まず、佐伯の文学意識や歴史感覚に大きな変化が生じ、つぎに、それを踏まえた形で佐伯は日本文学史全体を「エロス」という観点から再構築しようとしたのだが、結局、それを断念せざるを得なかったというのがその間の経緯である。そしてこの「変貌と断念」の後に、余儀なく生まれたものが、佐伯の自伝研究なのである。その結果、これが、今日では、佐伯の代表的な業績として多くの人に語り継がれることとなったのは、ある意味、戦後日本の文芸批評史における大きな皮肉と言えよう。

こうしたことを踏まえ、この論考では、まず、1962年から1964年までの2年間、40歳前後の佐伯がアメリカの大学で日本文学全般を講義した経験こそが、佐伯の文学意識や歴史感覚に大きな変化が生じさせたのではないかということを実証的に明らかにし、次に、佐伯が、その変化を受けて行った日本文学史の再構築作業がどうして成功しなかったのか、その理由について論じている。

### キーワード

佐伯彰一、文芸評論、文学的伝統、戦争体験、アメリカでの日本文学史講義、日米関係

## 1 はじめに

4年前の正月に93歳の生涯を終えた文芸批評家佐伯彰一（1922年4月26日—2016年1月1日）は、今まで誰1人としてこのことに正面切って論じたことはないのだが、実は1960年代後半から1970年代前半という10年間に文芸批評家として決定的とも言える変貌と断念を経験した。この変貌と断念は別物というわけではない。まず佐伯の文学意識や歴史感覚に大きな変化が生じ、それを踏まえた形で、佐伯は日本文学史全体を「エロス」という観点から再構築しようとしたのだが、結局それを断念したというのがその間の経緯である。その一方で、佐伯彰一というと、人はみな自伝研究を思い浮かべる。佐伯の弟子筋にあたる評論家入江隆則も「今日ま

での佐伯氏の文芸批評家としての最も大きな業績は、衆目の見るどころすでに四冊に及ぶ自伝論の完成であろう<sup>1)</sup>と述べているし、比較文学者の平川祐弘も佐伯彰一追悼記事の中で「氏の大功績の一つは、日本文壇に頑固に存する小説至上主義を排し、自伝文学を復権させ、戦後、自虐的にもてはやされた「西洋人には自我あり東洋人には自我がない」式の妄説を壊したことだ<sup>2)</sup>と記している。実際、佐伯も自伝ジャンル、伝記ジャンルの復権ということで精力的にその方面での執筆を行ってきた。しかしそうした佐伯の姿は、先に記した「変貌と断念」の後に、言うなれば余儀なく生まれたものなのだ。ところで今から半世紀前の1969年に文芸評論家の篠田一士は「『伝統』の創造的契機」と題するエッセイのなかで次のようなことを述べていた。

明治開国以来のわが近代文学芸術の歴史を展望してみた場合、創造力の契機としての伝統の所在は今日においても、なお判然としていない。(中略) 西欧派とよばれるひとたちも、また、国粹派とよばれるひとたちも、ひとしく、伝統のもつ創造的契機については概念としてこれを承知しているにもかかわらず、その肝心の伝統なるものの実体について、エリオットのように(中略)明確な断言ができないのである。<sup>3)</sup>

ここでのエリオットとは言うまでもなく「伝統と個人的な才能」を書いたT.S.エリオットのことである。もし50歳代前半の佐伯がもしあのとき日本文学史の再構築という試みを「断念」しなかったならば、佐伯が篠田の言う「明確な断言」をしていたのではないかと思われる。その意味で佐伯の断念は残念としか言いようがない。とはいえ、佐伯の思い描いていた再構築の試み、それをここでもう一度詳しく検討することは十分に意味あることだろう。しかしその前にそもそも佐伯の変貌とは何か、まずはここからはじめなければならない。少し掘め手からはじめたい。

## 2 佐伯彰一の変貌

最初に佐伯68歳の夏に行われた佐伯へのインタヴューの冒頭部分を引用しよう。

戦争中になぜアメリカ文学研究を思いついたのか、その辺は実は判然としませんですけれども、僕が東大の英文科に入りましたのは、一九四一年の春。その年の十二月に日米戦争が持ち上がったわけで、少しオーバーに言えば、アメリカに興味を持ち出した途端に、アメリカが敵国になりかわっちゃったというドラマティックな経験があったわけです。<sup>4)</sup>

ここで佐伯は「アメリカに興味を持ち出した途端に、アメリカが敵国になりかわっちゃった」と語っている。論者はこの経験こそ文芸批評家佐伯彰一の出発点と考えているのだが、そう結論づける前にこの一節をもう一度よく見てみよう。そうするとここでもかなり奇妙なことが語られているのに気づくはずである。というのも、東大英文科の学生である若き日の佐伯がアメリカ文学研究を思いついたことと、日米戦争が持ち上がったこととは、言うまでもなく、実際にはまったく別な話で、そこには本来何の関連もない、にもかかわらず佐伯はそこに関連を見出し、それどころか、そこに大きなドラマを想定し、しかも自分がその登場人物の1人であるかのように、あえて「ドラマティック」という言葉を使っているからだ。もちろん佐伯もこうした奇妙さには気がついているはずだ。それでもそのように言い切ってしまうのは、1つには、当時の若者が時代の趨勢に翻弄されてしまうという、ある意味悲劇的な話となり得るものを「ドラマティックな経験」とユーモラスに呼ぶことで若き日の思い出をカラッとしたものに変えたいという気持ちがあるからだろう。しかしそれだけではない。どうも佐伯は「アメリカに興味を持ち出した」ことと「アメリカが敵国になりかわっちゃった」こと、この2つには何らかの結びつきがあると本気で思っているようなのだ。それもドラマ仕立てで考えているようなのだ。これに関連して、もう1つ引用しよう。インタヴューの約6年前、佐伯62歳の1984年12月に刊行された『日米関係のなかの文学』からである。

日米戦争が勃発したのは、十九歳のぼくが、ちょうど大学に入った年でした。東大文学部に入って、アメリカ文学専攻と思いきめた年の暮れに、思いがけず戦争が起って、自分のえらび取った生涯の専

攻の対象が、一瞬にして敵国の文学となり変ってしまいました。この際のショックは、じつの所、すでに六十歳の坂をこした現在のぼくのうちにも、生き続けているものです。<sup>5)</sup> (傍点佐伯)

先に引用したものとほぼ同じである。敵国に傍点を付け、しかも「一瞬にして」という言葉まで付けている。まさに「ドラマティックな経験」そのものである。それにしても「すでに六十歳の坂をこした現在のぼくのうちにも、生き続けている」というのだから、「アメリカが敵国になりかわっちゃった」という体験がいかに深く佐伯のなかに根を下ろしているのか、この一節ほど明確に表現しているものはない。ところが話はこれで終わらない。佐伯が残した数多くの著書、論文、エッセイ等を辿ってゆくと、佐伯のこうした見方が最初からあったわけではなく、1960年代後半に突如として現われてきたことに気づく。まさに「突如として」としか言いようがないのだ。まずはこのことを明らかにしよう。

1969年2月に『アメリカ文学史——エゴのゆくえ』と題して刊行されて以来、いくつもの版を重ねている佐伯の著書に『アメリカ文学史』がある。その最後に「補足的に」と題された章があり、そこに2つのエッセイが収録されている。最初に置かれているエッセイは「アメリカ文学研究の問題——〈戦中派〉の場合」と題され、『文学』(岩波書店)(1960年4月号)に掲載された同名エッセイが初出である。2番目に置かれているものは「アメリカのエゴのゆくえ」と題され、『群像』(講談社)(1968年11月号)に掲載された同名エッセイが初出である。こちらは最初のエッセイの8年後に執筆されたことになる。どちらのエッセイも末尾に執筆時期が括弧書きで記されており、最初のもは1960年、2番目のものは1968年となっている。

まずは最初のエッセイ(1960年執筆)か

ら引用しよう。佐伯はこのエッセイの冒頭から「まずぼく自身の例から始めさせて頂く。ぼくは、昭和十六年に東大の英文科に入った。十六年は開戦の年であり、半年くり上げで、十八年の夏、卒業するまでずっと戦時下の英文科学生だった。学校を出ても、英語で飯を食うあては全くなかったし、それよりひどい病気にでもかからぬ限り、卒業はそのまま軍隊の門につながっていた。そんな時期に、なぜとくに英文科をえらぶ気持になったのか。勇ましい「抵抗」の精神などといい出せば、うそになる<sup>6)</sup>と記した後で以下のように語っている。

そんなぼくにとって、『白鯨』のあたえた衝撃は当然強烈だった。(中略) 孤独と反抗の強烈な探求者、造型者という一面こそ、ぼくの心をつき動かしたものであった。当時のぼくが、イギリス小説のなかに求めて見出し得ず、大いに不満がっていた所以のものが、メルヴィルによっていきよに満たされたようにさえ感じたのであった。『白鯨』を読みおえたぼくは、ただちに卒業論文にはこの作家を、と思いきめたのだが、ぼくの論文の主題は、もっぱらメルヴィルの、当時の社会的、また文学的環境からの異常に際立った孤立に向けられ、またそれほどの孤立をよく活力あふれる制作の動因に転じ得た秘密に向けられた。ぼくは、何よりこの作家のうちに、ロマン主義的なエグザイルの姿を、近代的芸術家の「栄光ある孤立」の一例を見てとることを望んだのである。(中略) 一番根元で働いていたのは、戦時下の重苦しさに対する反撥であり、当時のわが国にかくべつ多かつた順応的、「協力」的な作家へのつよい嫌悪であった。孤立こそ見事な文学的結実にみちびくという命題を、是が非でもわが手で確かめたい欲求は、そこから発していた。ぼくの卒業論文は、当然、

調子の高い、「孤立」讚美にかたむきがちであった、と記憶している。(中略) 要するにメルヴィルに読みふけた当時のぼくにとって、「アメリカ文学」という意識はきわめて稀薄であった。『白鯨』や『ピエール』は、まず限定ぬきの「文学」そのものであって、文学史や系譜という問題は、ぼくの念頭には浮かばなかった。(中略) それに、一世紀近い時代の距離も有利に働いて、この作家の同国人を相手に、自分の国が戦っているという眼前の事実も、何の重味ももたなかった。<sup>7)</sup> (傍点佐伯)

ここでも佐伯は「ぼくは、昭和十六年に東大の英文科に入った。十六年は開戦の年であり」と冒頭から開戦の話を持ち出す。しかしここには「敵国アメリカ」とか「ドラマティックな経験」という言葉は出てこない。それどころか、引用後半では「メルヴィルに読みふけた当時のぼくにとって、「アメリカ文学」という意識はきわめて稀薄であった」とさえ言い切っている。だからこそさらに佐伯は「この作家の同国人を相手に、自分の国が戦っているという眼前の事実も、何の重味ももたなかった」とさえ記すことになるのだ。ここには先に引用した2つとは正反対のことが記されている。当時の佐伯が文学青年ということもあり、なによりもまず文学そのものへの興味が強く、それが時にはロシア文学であったりフランス文学であったりもしていたから、意識してアメリカ文学を研究しようということではなかったのかもしれない。実際、佐伯は『『白鯨』や『ピエール』は、まず限定ぬきの〈文学〉そのものであって、文学史や系譜という問題は、ぼくの念頭には浮かばなかった」と記している。むしろエイハブ船長やピエールのなかに「ロマン主義的なエグザイルの姿を見てとることを望み」、青年期特有の昂揚の中で、佐伯青年はある意味自身をもそうした人物の1人に見立てていた

とも思われる。当時の佐伯にとってアメリカ文学が問題ではなく、あくまでもメルヴィルという作家が問題だったようなのだ。だからこそ孤立という文字がここには溢れているのだろう。それにしても先に触れた2つの引用との違いはあまりにも大きい。これに関して、さらに探求を進めてみたい。実はここに、これより先に書かれたエッセイがある。それは前年の1959年10月に刊行された『聲』に掲載された「(海外文学) ロレンスとアメリカ文学——アメリカ小説と想像力」である。これは最新の海外文学を紹介する欄に収められたものだが、この中で佐伯はD.H. ロレンスの『アメリカ古典文学研究』を引き合いに出しながら以下のように述べている。

ぼくがこの本(ロレンス『アメリカ古典文学研究』=引用者注)を始めて知ったのは、戦争中の、あの閑散で陰気な東大の英文研究室の片隅においてであった。(中略) 研究室の書棚にふと見つけた埃だらけのこの本は、ぼくの中の出来合いのアメリカ像を一気に叩きこわしてくれた。(中略) 二十歳の若者が「文学」の名で漠然と憧れていた何ものかが、そこに息づいていることを疑うことは出来なかった。ぼくは、さっそくその翌日から、自分で『白鯨』を読み始めたのである。<sup>8)</sup>

ここにはロレンスの導きによって文学そのものの魅力に直に触れあった感動や喜びが生き生きと語られている。佐伯はその少し先で「文学的〈開眼〉の喜び」<sup>9)</sup>という表現さえ使っていて、敵国などという言葉はまったくでてこない。むしろ「戦時下の隔絶された孤獨の中で、二十歳の無學な青年がおぼえた感動」<sup>10)</sup>という表現さえ見られ、先に引用した1960年時期の執筆とほとんど同じ視点であることが分かる。つまりこの当時の佐伯彰一、年齢の上から言えば30歳代の佐伯にとって、戦時中のアメリカ文学体験とはむしろ

メルヴィル体験あるいはメルヴィルを通じての文学開眼体験であったと思われ、さらに言えば自分自身をエイハブ船長のような「孤高」の存在に見立てていたとも考えられる。後年「アメリカに興味を持ち出した途端に、アメリカが敵国になりかわっちゃった」と繰り返し語るようになるようなものではまったくなかったのだ。ところが『アメリカ文学史』に収録されたもう1つのエッセイ（「アメリカのエゴのゆくえ」）となるとこれが一変するのだ。これは先に引用したエッセイの8年後、1968年に執筆されたものである。冒頭の部分を見てみよう。

アメリカの文学史の大筋さえろくすっぽ知らずに、いきなりメルヴィルの『白鯨』にぼくはぶつかった。しかも、太平洋戦争さ中のことで、げんに自分の国がたたかい、自分も間もなくぶつからされる敵国の文学という意識が、どこかで働いてもいた。異常な環境のもとでの、はりつめた初見参には違いなかった。<sup>11)</sup>

ここにはメルヴィルの『白鯨』という言葉こそ登場しているが、しかしいきなり敵国の文学という表現が出てきている。それも「げんに自分の国がたたかい、自分も間もなくぶつからされる敵国の文学」という言い方で。それどころか、「敵国の文学という意識が、どこかで働いてもいた」とあるうえに「異常な環境のもとでの、はりつめた初見参」と言うのだから、今読んででもその当時の佐伯の強い緊張感が伝わってくる。わずか8年前には「この作家の同国人を相手に、自分の国が戦っているという眼前の事実も、何の重味ももたなかった」と記していたなどまったく忘れてしまったかのようである。さらに見ていこう。すると以下のようなことが記されていることに気づく。

今からふり返ると、いわば入営早々で、

西も東も判らない新兵がいきなり敵の総司令官に面とぶち当たられたようなものだ。その上、その頃のぼくにとって、一番身近な愛読書が、川端康成の『雪国』や堀辰雄の『美しい村』という、まぎれもない戦時「星董派」のひとりだったから、この初対面、この組合せは、まるで誰かの手で仕組まれたかのように劇的なものだった。<sup>12)</sup>

ここには「まるで誰かの手で仕組まれたかのように劇的なものだった」とある。自己劇化、ここに極まりとでも言いたいような表現であるが、佐伯はまるで自分が大きなドラマの（主人公とは言わないまでも）劇中人物の1人であるような気分に浸っている。もう1つ、同様な例を示そう。今回も、先ほどから何度か引用している『アメリカ文学史』からである。冒頭にある「著者まえがき」から引用する。著書の刊行年から判断する限り、執筆時期は1969年初頭と考えられる。

戦争中の大学生としてアメリカ文学を読みはじめたぼくにとっては、アメリカ文学は、たんに任意の外国文学の一つではなく、かつて敵として戦った隣国の文学である。明治の開国以来、ほとんど運命的ともよびたい、入りくんだ絆でからみ合わされてきた隣国人の生み出した文学であり、この運命的な隣人の本質を見きわめ、わが手でたしかめたいという衝動を、ぼくのアメリカ文学を読む作業から排除することは不可能だ。その点、ぼくのアメリカ文学論は、ぼくなりのアメリカ論、アメリカ人論に直通せざるを得ない。<sup>13)</sup>

ここにも先の引用と同様に「敵として戦った」とか「運命的」という表現が使われている。となるとつぎのようなことが言えるのではないか。すなわち、1960年頃までは、佐

伯が戦時中のアメリカ文学体験を語る際には、アメリカ文学ではなく作家メルヴィルが、そしてむしろ文学そのものが前面に出ていて、そしてそこには孤立という言葉が溢れていたが、しかし60年代後半以降になると、アメリカが「敵国アメリカ」という表現で語られ、そして「ドラマティックな経験」という言葉があたかも定番であるかのように前面に登場して来る。明らかに佐伯自身に何かが生じ、その何かが若き自分への見方を大きく変貌させてしまったのだ。それにしてもこの違いは大きい。60年頃までは佐伯彰一という若き英文学徒の文学体験そのものが生々しく語られていた。しかしその分、社会からはまったく切り離された存在として描かれていた。60年当時の佐伯は学生時代の自分をそのように見ていたし、また文学とはそうした孤立の中で密かに営まれるものだというような、いささかロマン主義的な思いが強かったようにも思う。それが60年代後半になると、そうした見方が一変する。孤立どころか、むしろ社会の大きな動きの中にある存在として自分自身を見るようになる。言うなれば、頭でっかちなロマン主義者から脱却し、ある意味健全な歴史感覚が佐伯の中に生まれてきたとも言えるだろう。もっとも、健全であるとは必ずしも言えないかもしれない。というのも、佐伯はアメリカを単に敵国と見るだけではなく、それ以上の何かとして見ているからである。佐伯はここでアメリカを「ほとんど運命的ともよびたい、入りくんだ絆でからみ合わされてきた隣国」と表現し、さらにはもっと短く「運命的な隣人」とさえ呼んでいる。アメリカを「隣国」と見る、佐伯のこのような見方がいわゆる国際関係論あるいは日本外交史という分野で正統的なものであるかどうか寡聞にして知らない。むしろかなり極端な見方と言うべきものであろう。あるいはこう言った方がよいかも知れない。佐伯はこのとき日米両国の間に国際関係論あるいは外交史の専門家ではどうも見出すことができ

ないような何かを見出したのだと。もしかするとそれは佐伯にしか見出せないような何かかもしれない。それにしても「運命的ともよびたい、入りくんだ絆でからみ合わされてきた隣国」という表現は強烈である。ここまできると、佐伯特有の歴史認識としか言いようがない。これに関して佐伯は『内なるアメリカ・外なるアメリカ』の巻頭に置かれた「ドラマとしての日米関係」というエッセイの中で以下のような一節を記している。

アメリカとの関係をぬきにして、わが国の近代史を考えることはできない。たんに国際関係論上の欠くべからざる一項目というにはとどまらぬ、日本近代史の中核にまで、アメリカの存在は底深く食い込んでいる。という事実が、これまで意外に無視、少なくとも軽視されてきたのではないだろうか。(中略)太平洋をはさんだこの両国の関係は、その歴史的な成立の事情、人種的な構成から、自然的環境などにおける、余りにもいちじるしい対照、相違から始めて、その初期の接触、やがて太平洋上の激突に至った推移に至るまで、歴史の女神の手によって仕組まれた、一篇の壮大なドラマの趣をおのずからに備えている。<sup>14)</sup>(傍点引用者)

そう、佐伯は日米両国の関係のなかに「歴史の女神の手によって仕組まれた、一篇の壮大なドラマ」を見出していたのである。実際、佐伯はペリーの開国要求以来の日米交渉史百年の中になんと四幕物のドラマを見出してしまっているのである。

その接触のそもそもの発端からして、劇的な緊張をはらんだ、ほとんどオペラ的な開幕であり、重苦しい黒船騒動の後には、万延元年のわが国の遣米使節団による、ニューヨークの「ブロードウェイのページェント」が、引きつづいて一気に

緊張をときほごす「コミック・リリーフ」の役割をさえ果している。(中略) ドラマという比喩をここでもう一度とり上げれば、日米関係は、ここから、劇的な緊張と新展開をはらむ第二幕へと踏みこみ、やがてじりじりと、かつまっしぐらに、劇的なクライマックスたる第三幕へと突き進んで行ったといえるだろう。<sup>15)</sup>

そしてそのドラマに先ほど述べたように佐伯も登場人物の1人として登場することになるのだ。いやそれどころかむしろ自分が主人公の1人だと言っているようなところさえある。実はこのことを裏付けるかのような一節がある。それは『内なるアメリカ・外なるアメリカ』の2番目のエッセイ「『日米之新関係』——旅行記の楽しみ」(初出は『季刊芸術』第3巻第3号、1969年7月刊)に記されている一節である。

三〇年代半ばに中学生となって自宅から離れて下宿することになった時に、大事な愛蔵書としてたずさえていったうちの一冊が、『われ等若し戦はば』(一九三三)と題された、平田晉策による日米未来戦の物語であったことが、妙になまなましく記憶に残っている。敵としてのアメリカ、少なくとも仮想的としてのアメリカというイメージは、当時のすでにいささか文弱な少年にとってさえ、すでに自然に受け入れられる、身近なものとなり終っていた訳で、この少年がやがて十九歳で迎えた日米戦争のさなかに、メルヴィルの『白鯨』という捕鯨業の物語、ホイットマンのいわゆる「ぼくの西の海」たる太平洋を舞台とする小説をよんで、衝撃を受け、アメリカ文学専攻を思いきめるに至った次第をふり返ると、純粹観客を気取っている当のご本人が、いつか日米関係という大きなドラマのうちに組みこまれ、道化じみた端役を演じていた

ことを認めずにいられない。この大ドラマに対するぼくの年来の執心には、我にもあらずまきこまれ、舞台にひき出された男の怨念と執着のいりまじった探索癖が一役買っているのは確かである。とりわけ、敵としてのアメリカというイメージの生れ出た時期と次第については、大げさな比喩をあえて使わせてもらえば、わが身の破滅をかけて己れの過去の秘密へとにじり寄りざるを得ないオイデプスにも似た探索の衝動が働いているらしいのだ。<sup>16)</sup>

佐伯はここで、自分ではメルヴィルの『白鯨』との出会いによって生れた「偶然の結果」あるいはその「偶然性」をむしろ主体的に取り込んで、まさに自分の意志でアメリカ文学専攻という自分の進路を決定したように思っていたが、しかし実際には主体的どころかあたかも運命の女神に操られているように、一步一步、日米関係という大きなドラマの中の1つの存在として自分が組み込まれていたのではないか、いやそれどころか、まるでオイデプス王のようにじりじりと「わが身の破滅をかけて己れの過去の秘密へとにじり寄り」しているような状況だったのではないか、まさに道化じみた端役を演じていただけではないか、と言っているのだ。佐伯にとってこれらの言葉は比喩ではない。まさに文字通りに取るべきものである。佐伯はこのとき日本とまさに一体化しているのだ。日本が次第に日米戦争へと向わざるを得なくなると同じく、自分も敵国の文学を専攻する運命へと知らず知らずのうちに向っていた！という驚きである。これは実際、驚くほど誇大的な喩えであり、驚くほど独特な歴史認識である。69年当時の佐伯には、しかしながら、自分の来し方を顧みれば、そのように見えてしまうということなのだ。と同時にこのような喩えを使わざるを得ないような何かを、あるいはこのような喩えが必然性を持って口についてくる

ような何かを、佐伯がその少し前に実際に体験したのではないかと論者は考えている。それを経ることで佐伯はそのような独特な歴史認識を持つようになったのではないかと、そしてそれは、おそらくは1962年9月から約2年間、アメリカ中西部に滞在した時に体験したのではないかと、論者はそのように推測している。そのためもう一度1960年代の佐伯に戻って見なければならぬ。

### 3 佐伯のアメリカ体験

佐伯は戦後、アメリカ文学の専門家として出発する。1950年、佐伯28歳のときに第1回のガリオア留学生としてアメリカ・ウィスコンシン大学に1年間留学し、帰国後は富山大学から東京都立大学へと転任しながらも文芸雑誌の海外思潮紹介欄の常連執筆者として活動し、さらには文学時評家としても活躍しはじめる。佐伯はさらに仲間たちと同人誌『批評』を立ち上げ、精力的に批評活動に専念した。その佐伯が、英文学者の中野好夫の推輓で、1962年9月から1964年6月までのほぼ2年間、アメリカ・ミシガン大学でアメリカ人の学生相手に日本文学の講義をする。この講義体験が佐伯にもたらしたものは実に大きく、佐伯のその後の批評活動のすべてはここにあると言っても過言ではないのだが、そもそもミシガン大学滞在は佐伯にとって2度目のアメリカである。しかしながら朝鮮戦争勃発時に軍用機に乗せられて日本を出発するという慌ただしい中で始まった最初のアメリカ留学は、佐伯自身も言うように「まだ占領中で、敗戦国民という自意識がしみついていた上に、物質的な生活水準の面でも、彼我の差が大きすぎた。戦争前から長くひきつづいた半鎖国状態の中で青春をすごしたあと、初めてふれる異国は、何かにつけて刺戟がつよすぎ」<sup>17)</sup>、そのため「手に負えぬ怪物にいきなりのしかかられたような圧迫感をおぼえ(た)」<sup>18)</sup> 佐伯は、逆にアメリカを

一刀両断に批判することで精神の平衡を保とうとする。曰く、アメリカは「一切を平べったく、空間的に割り切るばかりで、歴史の感覚、時間の厚みの感覚を欠いている」<sup>19)</sup> 云々。しかし同時にそう批判する佐伯自身、「ぼくは、こうした批判をささえる時間の厚み、伝統と歴史の感覚が、自分の国で、足もとから急激にくずれさりつつあることを思い出さぬわけにはゆかなかった」<sup>20)</sup> と記している。ここにある通り、最初のアメリカ滞在では戦勝国アメリカに何もかも圧倒され、その結果、肝心の日本そのものも佐伯の中では徹底的に崩壊してしまったというのが正直なところであったと思われる。それが2回目の滞在となると日本が占領下から高度成長の国へと大きく移り変わり、経済的にも豊かさを実感しはじめ、まもなく東京オリンピックが開催されるということで総体的に日本の国力も増してきたという時代背景のもと、佐伯自身にも心の余裕が生まれ、以下のような感慨を記すことになる。

アメリカの雑種性や遠心力がまず気にかかるというのは、つまりは、ぼくが日本人であるせいかも知れぬ、と気づき始めた。(中略)そして事実、雑種国アメリカのイメージが、ぼくの内側で固まってくるにつれて、その向う側の対極におのずと純種国日本の姿が、くっきりと浮び上がってきたのだ。これは、いわば相関的な認識作用であって(中略)二つの国が互いに相手をうつし出す「鏡」の役を呈しはじめたあんばいであった。日本よ、お前は何と等質的、均質的な純種国なのだろう、ぼくはそう呟かざるを得なかった。この感慨は、ミシガン大学で日本文学史のコースを受けもつことによって強められこそすれ、弱まりなどしなかった。この文学史のコースは、素人読者たるぼくにとって、辛くかつ楽しい仕事であったが、一年間、二つの学期をかけて、古

事記、万葉から太宰治、三島由紀夫まで下ってくる間、この感慨は、ぼくの内側で終始、低音バスのようにひびきつづけて止むことがなかった。明治以前と以後の間には、文学上、また文化上「断絶」が生じた、という「定説」のごとき、じつは一種の自己欺瞞以上のものではない、と思われてきた。<sup>21)</sup> (傍点佐伯)

佐伯がここで触れている古事記、万葉からの日本文学の連続性という主題はこの時期以降佐伯がたえず繰り返すことになるのだが、ここでは文学や文化に限らず、まずは日本という国全体がアメリカとの「鏡像」関係のなかで浮かび上がってきたことに注目したい。実際、佐伯は「文学的持続という問題は改めてとりあげるつもりだが、ここでは、単一民族が（起源はとにかく、そう言っていいだろう）、いくつかの小さな島に住みつづけて、異民族の支配、侵入を受けることも、こんどの敗戦まで全くなかったという条件が、育てあげた純種民族のメンタリティと感受性のうちに一寸比類のない有機性、一貫性を生み出した点を指摘しておけば足りる」<sup>22)</sup>と記しているように、2度目のアメリカ滞在で佐伯の脳裏に浮かび上がってきたものは純種民族の一貫性に包まれた日本列島の姿なのだ。実際、佐伯はこのことを、佐伯が偏愛する井伏鱒二の作品『漂民宇三郎』（講談社、1956年刊行）に託して幾度も繰り返して強調する。

とくに外国に出て暮らす時に、井伏作品は、手離しがたい伴侶となる。六〇年代のはじめ、アメリカの中西部で二年間暮らした時に始めて読んだ『漂民宇三郎』のつよい感銘は長い異国暮らしの実感ととけ合っているにまだに忘れがたい（後略）。<sup>23)</sup>

この引用の少し先でも、佐伯は『『漂民宇三郎』の中には、わずかに残った「一粒の

粿」をいかにして異郷の土に植えつけ、実らせるかという挿話がさりげなく描きこまれていた。十一年前、アメリカ中西部のきびしい冬のさ中に、この一節を読んでつよく心ゆさぶられた記憶は今も鮮かだ（以下略）<sup>24)</sup>と記すことで、再びミシガン体験と『漂民宇三郎』を結びつける。さらに上の引用の直前に「しかし、この点については、『漂民宇三郎』を愛読して帰ったアメリカ滞留の直後、「戦後文学の断絶と連続」（『日本を考える』一九六六）という文章でぼくは詳しく論じた覚えがある」<sup>25)</sup>とあり、そこでも『漂民宇三郎』の一節を引用しつつ以下のように述べている。

かくべつぼくらの印象に残るのは、主人公の宇三郎が洋上漂流の最中にふと見つけ、異常なほどの心くばりで渋紙袋に入れて保存する粿、「糯米の粿が一粒、粳米の粿が一粒」という、二粒の粿である。ハワイに上陸すれば、宇三郎はただちに、米作りに熱中して、「二粒の粿で、このウワへの島を豊草原瑞穂の国にするつもりじゃ」と思わず口にしてしまう。（中略）この主人公の投げこまれた状況、つぎつぎとなめさせられた「前代未聞の」苦難の中で、彼の生き抜く意力をささえてくれた支えが、「二粒の粿」に他ならなかったことだけは、はっきりと確認しておきたいのだ。（中略）「二粒の粿」というのは、根深い共同的な広がりを感じさせるイメージである。たんに宇三郎個人の意志や個性を超えた、大いなる持続という象徴的な含意がおのずとただよっている。そこに含意されているのは、日本人としての同一性（identity）、また連続性ではないだろうか。<sup>26)</sup>

ここで佐伯はほぼ同じような意味を有する言葉を次々とあげている。すなわち「根深い共同的な広がり」、「大いなる持続」そして「日

本人としての同一性 (identity) と「連続性」である。これらが「純種民族の一貫性に包まれた日本列島の姿」とびったり重なり合っていることは言うまでもないだろう。佐伯はさらに論を進め、この「二粒の粳」の背後に人間の歴史を超えた自然の大きなサイクルまでも見ようとしている。

「宇三郎はオイレンとの間に自分の子供が出来たので、思ひつきを得て、広東米と日本米との交配種をつくろうとして失敗した。米の場合は、人間と違って、お互いに交配を許さないほど祖先が遠く隔ってゐるのだろう」。この結びの部分をよんで、読者は粳種子という象徴の一貫した重要性を改めて思い起さざるを得ない(後略)。つまり、粳種子は、人間よりも遙かに古く、その息の長さ、恒久的な連続性において、人種の差などを桁違いに立ち超えた何物か—自然とよぶ他ないものを思わずにおかぬ。宇三郎という主人公の後景に、日本が現われ、そのまた遙か奥の後景に、自然が浮び上ってくる、といってもいい。<sup>27)</sup>

佐伯は「宇三郎という主人公の後景に、日本が現われ」と言うが、実はアメリカの中西部の厳しい冬の寒さに一人耐えていた佐伯の前にも、宇三郎が豊葦原瑞穂の国を思い描いたと同じく、「根深い共同的な広がり」を持った日本列島の姿が1つの像としてありありと立ち現われてきたのではないか。そしてこのとき同時に、日本と鏡像関係にある「雑種国」アメリカの姿も佐伯には見えていたに違いない。先の引用では「雑種国アメリカのイメージが、ぼくの内側で固まってくるにつれて、その向う側の対極におのずと純種国日本の姿が、くっきりと浮び上がってきた」としているが本質的には同じことだ。重要なのはこのとき佐伯の中でたえず日本とアメリカが鏡像のように互いに映し合っているというこ

とである。その結果、太平洋という巨大な海を挟んで東と西に位置する日本とアメリカが、佐伯には直接の隣国同士、直接の隣人同士としてはっきりと見えたのだ。しかも浮かび上がってきた日本は、雑種国アメリカとは異なり、「大いなる持続」を有し、「日本人としての同一性 (identity) 」や「連続性」が昔から維持されているのだ。言うなれば、古代以来の伝統と歴史がここに幾層にも積み重なっているのだ。佐伯はこのときこのことがまざまざと見えたのだ。

先に見たとおり 1960 年当時では、約 20 年前の学生時代の自分を想起しながら書いているにせよ、「社会的、文学的環境からの異常に際立った孤立」とか「ロマン主義的なエグザイル」あるいは「文学史や系譜という問題は、ぼくの念頭には浮かばなかった」という表現の連続であった。それが、アメリカ・中西部での 2 年間の滞在を通じて、佐伯には伝統と歴史が幾層にも積み重なっている日本を明確な像として見るができるようになった。このとき佐伯には「社会的、文学的環境からの異常に際立った孤立」などという思いはもはやまったくくない。むしろ日本という「根深い共同的な広がり」と強く結びつくことで、宇三郎と同様に、何とか生き抜こうとしているところさえある。それまでの、いわば観念的な孤立願望、エグザイル願望から、60 年代後半の佐伯はすっかり解放されたのである。ちなみに、このときの佐伯は宇三郎の背後に「のっぺらぼう」とした現実を見ている。

宇三郎には、国家という後ろ立てもなければ、排外的な熱狂に駆り立てられている訳でもない。(中略) およそそうした支柱が物の役に立たぬ場所に、始めから放り出されるのであり、そういう「のっぺらぼう」の場所で彼はふと見出すのが、「二粒の粳」に他ならない。(中略) それ以外の依拠が一切意味を失い、頼りにな

らなくなった「のっぺらぼう」の場所で、ふとこれを見つけ、これを守りぬこうと思いきめる。これ以外になかったものだから、と低声に呟きながら。<sup>28)</sup>

ここで佐伯は「〈のっぺらぼう〉の場所」という表現を繰り返している。この繰り返しはただ事ではない。この表現は佐伯がアメリカ・中西部で過ごした2年間を象徴するものではないか。言い換えれば、佐伯はアメリカ・中西部滞在の2年間、とりわけ「中西部のきびしい冬」の時期、まさに何も守ってくれるものがないような場所で厳しい異国の現実にひとり向かい合っていたということではないだろうか。もちろんこの場合の「厳しい異国の現実」とは現実生活の厳しさを意味しているわけではない。そうではなく、佐伯の意識下においてアメリカがそのようなものとしてあったということの意味している。それをよく示す例をあげよう。

ぼくが始めてハワイの土をふんだのが敗戦から五年目、一九五〇年夏のことだった。(中略) おそらく、当時の真珠湾は、ぼくにはアンタッチャブルともいいたいほど刺戟が強すぎた。(中略) アメリカ人との接触では、Remember Pearl Harbor がいつ相手の口から飛び出してくるか、身構えざるを得ないような時期でもあった。(中略) このあと、ハワイには何度も立ちよりながら、わがうちなる禁忌感情は、なかなかその支配、抑制をゆるめてくれなかった。ぼくが、もう一度真珠湾に近づいて、しげしげとその全容を見わたすに至ったのは、ようやく一九七三年五月のことである。(中略) 年内の内なるしこりが、ふっと溶けさるような解放感をおぼえたことも事実で、いわばタブー犯しの試練を、この時のぼくは、くぐり抜けたのである。<sup>29)</sup> (傍点 佐伯)

これは真珠湾の場合であるが、しかしその緊張が解けたのが何と戦後も30年近く経ってからのことである。これが戦中派世代の持っている敵国アメリカへの思いなのであろう。このような事実があるからこそ、佐伯が「何も守ってくれるものがないような場所で厳しい異国の現実にひとり向かい合っていた」と考えられるのだ。そして、宇三郎が二粒の糲にすがりついて生き抜いたと同様、佐伯もこのとき自分の手元にあった日本文学にすがりつくことでその場所を、その時期を日本人として生き抜こうとしたと思われる。だからこそ、日本文学の古代以来の連続性、持続性を心強い思いで文字通り実感したのではないか。これが先に「このような喩えを使わざるを得ないような何かを(中略)佐伯がその少し前に実際に体験したのではないか」と記したことの意味である。佐伯は大きく変貌する。その結果、佐伯はそれまでの観念的な文学観から脱却し、日本文学全体の実体をその連続性や持続性とともにはっきりと把握することになったのだ。まさに文学的伝統というものを認識したのである。この意味は今日想像する以上に大きい。というのも、江戸からの断絶、戦前からの断絶という断絶史観的文学意識の中で過ごしてきた佐伯にとって、そうした意識を乗り越えることはかなりの精神的緊張を有するものであったろうと思われるからである。実際、アメリカ・ミシガン大学滞在からの帰国直後に連載したエッセイをまとめた『日本を考える』は、ほぼ全編、そうした緊張感に包まれている。その中で佐伯は「文学史を底で支えるものは、文学的持続においてあり得ない。もちろん、それぞれの時代は、先行する時代に対する批判、否定をふくみつつ、先へふみ出す。しかし、批判や否定ということ自体、持続ぬきでは考えられぬことであり、さらにいえば持続のヴァリエーションにすぎない」<sup>30)</sup>と記しているが、こう記すだけでもかなりの重圧を感じていた

ように思う。その佐伯がこのとき日本の文学的伝統を実感し、まさにその眼で伝統そのものを見たのだ。ここで誰しも T.S. エリオットのつぎの一節を思い浮かべよう。

歴史的な感覚は、過去が過去であるということだけでなく、過去が現在に生きているということの認識を含むものであり、それは我々がものを書く時、自分の世代が自分とともにあるということのみならず、ホメロス以来のヨーロッパ文学全体、及びその一部をなしている自分の国の文学全体が同時に存在していて、一つの秩序を形成していることを感じさせずには置かないものなのである。この歴史的な感覚は、時間的なものばかりでなくて、時間を越えたものに対する感覚であり、そして又、時間的なものと時間を越えたものを一緒に認識する感覚でもあって、それがあつたことが文学者に伝統というものを持たせる。<sup>31)</sup>

佐伯はこのときエリオットとほぼ同じ地点にいる。しかしながらエリオットのように断言するまでには至らない。それをするには日本文学史全体の再構築という大きな作業が必要なのだ。しかしそれには道具がまだ十分ではない。佐伯はこれ以降その道具を求めるところに専念することになるだろう。

#### 4 「エロス」の発見

今、論者の手元に 1971 年 8 月号の『群像』に掲載された、単行本未収録論文がある。論文タイトルは「文学史の基軸を求めて——日本文学の「獨創性」」（以下「文学史の基軸」と略する）である。そのなかで佐伯はまずはある切実な問いを立てる。

ぼくらの国は、かつて中国文明の周辺にあり、また明治以後、ヨーロッパ文明の

辺境にみずからを位置づけながら生きてきた。いずれの場合も、周辺また辺境という位置についての自意識はぼくらのうちに根深く沁みついている。一九四五年における敗戦以後は、アメリカ文明の周辺である。アメリカ化を抜きにして、敗戦後の日本を考えることは出来ない。こうした周辺意識、辺境意識は（中略）文明上、生活上の事実であり、ほとんど文化的な宿命に近かった。（中略）では、日本文学は、本質的に周辺の、派生的な文学、ローカルな文学であったか？中国文明との大巾な接触以来、ローカルな周辺の立場にとどまりつづけて、一貫した被影響の受身一方の文学であったのか？<sup>32)</sup>（傍点佐伯）

このように問うた佐伯はすぐさま以下のように続ける。

日本文学史を全体として、二次的、派生的などと切り捨てることは、到底出来ない。それどころか、これぐらい特異な個性を一貫して守りぬいてきた文学は、世界文学史になると見出しがたいだろう。ほとんど一貫して受身的、受容的な姿勢をつづけながら、しかも無類の頑くなさでみずからを保ってきた。（中略）日本文学史は全体として、まことに有機的な一貫性、連続性を保って現在に至っている。<sup>33)</sup>

ここから佐伯はさらに問いを進めて、ではどうして受身的、受容的な姿勢を続けながらも日本文学は連続性、一貫性を保つことができたのかと問う。

日本文学史における連続性は、いわゆる古典主義、伝統主義といった教条的なものうちにはなく、むしろ感受性、また感受性の器としての様式のうちに息づい

ている。思想や主張よりは、無意識の底層のうちに生きのびているという点である。

ぼくらの国の強味は、明らかに感受性と様式の側にあり、無意識の層に存する。日本文学史の基軸は、意識的な趣味や思想の羅列ではなく、こちら側にこそすえ直されなくてはならぬ。終始一貫、一見弱々しい受身の姿勢にとどまりながら、みずからを保ち得た所以は、こうした秘められた意識下の回復力、活力に他ならない。外来の大イデオロギーに対して素直すぎるほど柔順にわが身をひらき、ゆだねながら、いつかわが身の動きとリズムに相手を従わせてしまう。そういう際に、きわめて微妙に、しかしもっとも有力な抵抗素として働きつづけてきたのが、他ならぬエロスであった（後略）<sup>34</sup>。

佐伯は、外来の相手に従いつつも、いつの間にか相手を自分の側に取り込んでしまうのが日本文化、日本文学の特徴であり、それが連続性、持続性を支えているのだと言う。つまり、いささか逆説的な言い方になるが、大文化圏の周辺や境界に位置するがゆえに日本文学はその連続性を保ち得たと言うのだ。その際、佐伯が強調するのが「思想や主張よりは、無意識の底層のうちに生きのびている」という点である。佐伯の主張のポイントはここにある。したがって単に大文化圏の周辺や境界に位置するがゆえにそうなるというわけではない。そうではなく、外来の思想や観念という、いわば強面の存在を上手くやり過ごしながらも、次第に感受性や無意識といった十分に理論化や言語化できない地点にまでそれらを引っ張り込むことでいつしか自分のものにしてしまう、これが日本文化、日本文学の連続性の秘訣であると佐伯は言う。とはいえ、ここで注目すべきは実はこのことではない。このことももちろん大事だが、それ以上に大事なことは、ここで佐伯が徹底的に性的

なイメージで語っていることである。もっとあからさまに言ってしまうと、佐伯は男女の性的関係をそこに見ているのだ。だから佐伯は「外来の大イデオロギーに対して素直すぎるほど柔順にわが身をひらき、ゆだねながら、いつかわが身の動きとリズムに相手を従わせてしまう」と記すのである。佐伯は中国、ヨーロッパさらにはアメリカといった国々と日本との間にまさにきわめて濃厚で密接な男女関係を見出しているのだ。アメリカ・ミシガン大学滞在時に日米両国が互いに鏡像関係になっていることを見出した佐伯は、その後も大文化の国と日本との間に密接な関係を見出し続けたのである。実際、佐伯はここから佐伯批評の中心概念とも言うべき「エロス」を見出すことになるのだ。

日本の文学を支えてきたものの大きな根源の一つとして、エロスの問題ということがあるように思うのです。他の国の文学に比べて、エロスの比重がじつに大きい。（中略）『古事記』『万葉』以来、『伊勢』か『源氏』の平安朝、それから江戸となると、これはさらに輪をかけている。エロスをひいたら、日本文学にはほとんど何も残らない。エロスこそ、日本文学の輝ける正統といわざるを得ない。（中略）どうして、エロスというのが日本文学で、これほど大きな役割を果たしてきたのか、またそのエロスの特質いかにというのが、日本文学史家の答えるべき第一の問題じゃないか、と思うのです。ぼくの考えでは、それは日本の、大げさに言うと文明史というか、日本の置かれた文化的な状況ということと関係があるのではないか。（中略）公の大きなイデオロギーというのは、日本はしょっちゅう輸入でまかなってきた国だと思うのです。そこで、この終始受身の輸入国での、いわば抵抗素、これがエロスではなかったか、と思うのです。イデオロギーは、ど

らんどん受け入れる。そして最後のところを、エロスでバランスをとりもどす。受身的な女性における肉体、いろいろな理窟は男性にいわせておいて、最後は肉体という切り札で勝負する、そんな所がありはしないか。<sup>35)</sup>

いささか長い引用となったが、佐伯はこのような「エロス」を見出したことではじめて、日本文化、日本文学を、他の大文化との間でたえず均衡を取っているきわめて動的で開かれたシステムの1つと考えるようになったのだ。というのも、佐伯は実はアメリカ・ミシガン大学滞在直前の1962年6月号『文藝』に「日本人の想像力——小説と「様式」に関する試論」と題する論文を掲載している。その中で佐伯は日本文学の連続性に関して以下のように述べているからである。

わが国では、ある文学的な表現様式や型が一たん確立されると、これがじつに粘りづよく維持され、受けつがれてゆく。後につづく各時代は、これに丹念な加工をほどこし、微妙なヴァリエーションを生みつづける点では驚くべき執拗さを示すのだが、これと正面切った対決を行い、破壊的な批評を加えることはめったにない。(中略) ぼくは以前、こうして連続として途絶えることを知らぬ不思議な持続性を、戯れに「文学における万世一系」とよんでみたことがある。わが天皇制と同じく、移動はあったが、明確な交替や断絶はなかった。いわばノッペラボウの連続性が文学史を縦割りにして相並んでいる奇観は、他国の文学史には例の少ない現象ではあるまいか。<sup>36)</sup> (傍点佐伯)

佐伯は1962年春の時点ですでに日本文学における連続性を明確に認識していた。しかし同時に当時の佐伯にはそれをどうにも認めたくない思いが強く存在していたのだ。実際、

佐伯は「何らかの観念的・倫理的な理想への献身というより、一たび精妙に確立された審美的なパターンへの随順であり、陶酔的な執着とってよい」<sup>37)</sup>と述べることで、生産的でも創造的でもない日本文学の連続性に激しく苛立っていたのである。佐伯はヨーロッパの作家たちを引き合いに出して「ヨーロッパの作家たちが、その固定観念を守りぬぐために、ほとんどの場合、大いなる理論的武装という後ろ立てを必要とした——つまり、そこには人為的な努力、無理な緊張の匂いがまといついていた」<sup>38)</sup>のに対して、「わが国の場合は、これがいとも軽々と自然になされている」<sup>39)</sup>のだと嘆いてさえいたのだ。その結果、佐伯は、他のほとんどの批評家と同じく、江戸からの「断絶」の勝利を高らかに宣言することさえ行っていたのだ。

こうした「様式」の至福状態、また型への執着と外的対象への密着(写実への意志=引用者注)という二つの相反する衝動の間の幸福な結婚が西欧の衝撃によって激しくゆさぶられ破壊されたところから、明治以来のわれわれの文学、とくに小説ジャンルは歩き出てきたのである。(中略) 伝統的な「型」は、忽ち人々のあらゆる嫌悪の的と化し去った。まず、「型」に対するやみくもな反抗心に駆り立てられることが、作家たる第一の資格とすら見なされた。<sup>40)</sup>

ここには先の引用にあるような「動的で開かれたシステム」への視点が徹底的に欠けている。日本文学の連続性と言いながら佐伯がここで注目するのはきわめて静的な型のみである。だから佐伯は「一たび精妙に確立された審美的なパターンへの随順であり、陶酔的な執着」という、いささか偏執狂的なニュアンスを帯びた表現を繰り返すのである。ところが、2年間のアメリカ滞時に佐伯が日米両国の鏡像的な関係を見出し、やがて次第に

日本と中国、日本とヨーロッパとの間にも同様の動的な均衡関係を見出すようになり、そして最終的には「エロス」を発見するようになると、佐伯は日本文学の連続性をあたかも目の前に現前するかのごとく見ることになったのである。その結果、1962年6月号掲載の論文とはまさに正反対の主張が展開されることになったのである。これこそ佐伯の大きな変貌の典型例と言えるだろう。

かくして佐伯はアメリカからの帰国後「エロス」という基底を間にはさんでの、旅、鎮魂、エロスという「日本文学の三幅対」<sup>41)</sup>を基軸に日本文学史全体の再構築の作業に取りかかることになる。まさに「道具」を得た佐伯は、つぎはその「道具」をもとに日本の文学的伝統を高らかに宣言する寸前まで来たのである。しかしここで再び大きな困難が佐伯の前に立ち現われる。

## 5 おわりに——佐伯の断念

それは肝心の「エロス」がその本性上、理論化、言語化ができないということから来ている。佐伯は言う。

エロスは日本文学にとって、文化史的に終始受身の被影響国の文学にとって、根源的な抵抗素、有機的な連続性をつちかってくれる源という役割を果してくれたけれど、それ自体抽象化し、脱離するメタフィジカルな超越的な力に欠けがちである。(中略)(エロスは＝引用者)原型的な衝動であり、パターンである。「衝動」という、ニイチェのディオニュソスのなもの、またロレンスの「暗黒の神」を思わせるような用語が、同時にほかならぬ、アポロ的な明澄な形象化、様式化といかにしてわかち難く重なり合うかという大問題はすでにいく度か手をつけながら、まだほんのとは口にすぎない。今回も、じつはそのこの所をこそ目がけ、エ

ロスの衝動が、そのまま様式化のバネに、また原理に転化(する＝引用者注)所以に立ち入ろうと思いつつ、入口で又してももたついてしまった。<sup>42)</sup>

佐伯はここで、エロスの衝動を何とか形象化、様式化しようとこれまでも何度か試みたが、そのつど「入口で又してももたついて」しまったことを告白している。「又しても」という表現はその困難さを表現している。しかしこれはある意味当然の結果とも言える。もちろんこのことは佐伯も十分に分かっている。そこで佐伯は作戦を変え、「エロスの衝動が、そのまま様式化のバネに、また原理に転化しつづける審美的な瞬間」<sup>43)</sup>を捉え、その途切れざる連鎖を描くことで、日本文学史の連続性そのものを、いわば搦め手から描こうと考えることになったのである。日本文学史を貫く原理そのものを明らかにするのではなく、言うなれば、場面、場面をスナップ写真のように何枚も写し撮り、それをずらっと並べることで日本文学史の連続性を示そうと考えたのである。それが『日本の「私」を求めて』(河出書房新社、1974年)という佐伯の著書なのではないかと思う。ここから『日本人の自伝』(講談社、1974年)まではほんの数歩しか離れていない。実際、佐伯はこの間の経緯を以下のように記している。

ぼくの眼には、日本人の「私」の特徴は、どうやらその入りくんだ重層性、いわば多層共存、雑居の面白さにあるように思われたのである。そこで(中略)『日本の私を求めて』という連載評論を書き出した時(中略)こうした地層的な探索に焦点をおいて書きすすめることとなった。そこで、儒教的＝武士道的な「私」、仏教的＝中世的な「私」、神道的＝古代的な「私」といった地層の重なり具合をたしかめることが、ぼくの仕事の中心と

なり（中略）ようやく七四年に一応完結にこぎつけることが出来た。というのも、これより少し遅れて、しかしほぼ平行的に『日本人の自伝』という連載に取りかかったせいもあるのだが、この二つの仕事は、ぼくとして表裏一体のつもりの日本の「私」研究であった。（中略）古来、ほぼ一貫して受身的、被影響的で、外来文化に対してかくべつ「弱い」としか見えないわが国の文化、文学に、果して主体的、積極的な意志を、また主体性が見出し得るのかどうか。（中略）この難問に答える鍵の一つが、どうやら日本的「私」の構造のうちに見つかるという勘が、ぼくなりの探求の原動力であった。<sup>44)</sup>

佐伯は、かくして「エロス」を基底とする三幅対による日本文学史の再構築を断念することになった。したがってこれ以降、「抵抗素としてのエロス」というような形でエロスという言葉を使うことはなくなった。ましてや「原型的衝動としてのエロス」などとはもはや言わない。ごく普通の意味でのエロス、つまり性的な領域の中の用語として使うに過ぎない。ある意味、これは大いに残念なことである。しかし佐伯は、日本文学史の局所におけるスナップ写真を多数撮影し、それを積分することで、日本文学史の再構築という大きな課題への自分なりの任を果たそうとしたと言えるのではないだろうか。これが文芸批評家佐伯彰一の変貌と断念の全貌である。

#### <注>

- 1) 入江隆則 1989年「佐伯彰一・人と作品」『昭和文学全集・28』小学館、1078頁。
- 2) 平川祐弘 2016年「平成28年1月11日・産経新聞掲載、佐伯彰一追悼記事」。
- 3) 篠田一士 1969年「『<伝統>の創造的契機」『現代人の思想 14 伝統と現代』平凡社、13頁-14頁。

- 4) 佐伯彰一 1990年「佐伯彰一先生に聞く」『東京大学アメリカ研究資料センター・オーラルヒストリーシリーズ・26』、1頁。（インタビューは1990年8月30日に行われた）
- 5) 佐伯彰一 1984年『日米関係のなかの文学』文藝春秋、359頁。
- 6) 佐伯彰一 1969年『アメリカ文学史 エゴのゆくえ』筑摩書房、2頁-7頁。
- 7) 佐伯彰一 1969年『アメリカ文学史 エゴのゆくえ』筑摩書房、219頁-223頁。
- 8) 佐伯彰一 1959年「(海外文学) ロレンスとアメリカ文学——アメリカ小説と想像力」『聲』丸善、1959年秋号、128頁-129頁。
- 9) 同論文、129頁。
- 10) 同論文、132頁。
- 11) 佐伯彰一 1969年『アメリカ文学史 エゴのゆくえ』筑摩書房、229頁-230頁。
- 12) 佐伯彰一 1969年『アメリカ文学史 エゴのゆくえ』筑摩書房、230頁。
- 13) 同書、4頁。
- 14) 佐伯彰一 1971年『内なるアメリカ・外なるアメリカ』新潮社、9頁-11頁。
- 15) 同書、11頁-14頁。
- 16) 佐伯彰一 1971年『内なるアメリカ・外なるアメリカ』新潮社、35頁-36頁。
- 17) 佐伯彰一 1966年『日本を考える』新潮社、13頁。
- 18) 同書、同頁。
- 19) 同書、15頁。
- 20) 同書、同頁。
- 21) 佐伯彰一 1966年『日本を考える』新潮社、27頁-28頁。
- 22) 同書、29頁。
- 23) 佐伯彰一 1975年「『井伏鱒二の逆説』『新潮』新潮社、1975年3月号、169頁。
- 24) 同論文、189頁。
- 25) 同論文、188頁。
- 26) 佐伯彰一 1966年『日本を考える』新潮社、171頁。
- 27) 同書、174頁-175頁。
- 28) 佐伯彰一 1966年『日本を考える』新

潮社、173頁。

29) 佐伯彰一 1984年『日米関係のなかの文学』文藝春秋、45頁－48頁。

30) 佐伯彰一 1966年『日本を考える』新潮社、147頁。

31) エリオット、T. S. 1959年「伝統と個人的な才能」『エリオット選集・第1巻』吉田健一訳、彌生書房、11頁。

32) 佐伯彰一 1971年「文学史の基軸を求めて——日本文学の「独創性」」『群像』講談社、1971年8月号、211頁－212頁。

33) 同論文、216頁。

34) 同論文、217頁。

35) 佐伯彰一 1968年「〈座談会〉原型と現代小説」『批評』番町書房、第14号、1968年12月刊、112頁－113頁。なお、この引用は、山本健吉、三島由紀夫、佐伯彰一の三氏による座談会から、佐伯彰一の発言のみを抜粋したものである。

36) 佐伯彰一 1962年「日本人の想像力——小説と「様式」に関する試論」『文藝』河出書房、1962年6月号、212頁。

37) 同論文、214頁。

38) 同論文、213頁。

39) 同論文、同頁。

40) 同論文、218頁－219頁。

41) 佐伯彰一 1971年「文学史の基軸を求めて——日本文学の「独創性」」『群像』講談社、1971年8月号、218頁。

42) 佐伯彰一 1971年「文学史の基軸を求めて——日本文学の「独創性」」『群像』講談社、1971年8月号、218頁－219頁。

43) 同論文、219頁。

44) 佐伯彰一 1978年「さらされ」の時代と基軸の探求」『昭和批評体系』番町書房、第5巻—昭和40年代—収録解説、37頁－38頁。

#### <参照文献>

入江隆則 1989「佐伯彰一・人と作品」『昭和文学全集・28』小学館、p.1078。

エリオット、T. S. 1959「伝統と個人的な才能」『エリオット選集・第1巻』吉田健一訳、彌生書房、p.11。

佐伯彰一 1959「(海外文学) ロレンスとアメリカ文学——アメリカ小説と想像力」『聲』丸善、1959(秋)、pp.128-133。

佐伯彰一 1962「日本人の想像力——小説と「様式」に関する試論」『文藝』河出書房新社、1962(6)、pp.209-219。

佐伯彰一 1966『日本を考える』、新潮社。

佐伯彰一 1968「〈座談会〉原型と現代小説」『批評』14(12)、pp.110-144。

佐伯彰一 1969『アメリカ文学史 エゴのゆくえ』筑摩書房。

佐伯彰一 1971a『内なるアメリカ・外なるアメリカ』新潮社。

佐伯彰一 1971b「文学史の基軸を求めて——日本文学の「独創性」」『群像』講談社、1971(8)、pp.210-221。

佐伯彰一 1975「井伏鱒二の逆説」『新潮』新潮社、1975(3)、pp.168-191。

佐伯彰一 1978「さらされ」の時代と基軸の探求」『昭和批評体系第5巻—昭和40年代』番町書房、pp.37-38。

佐伯彰一 1984『日米関係のなかの文学』文藝春秋。

佐伯彰一 1990「佐伯彰一先生に聞く」『東京大学アメリカ研究資料センター・オーラルヒストリーシリーズ・26』p.1。

篠田一士 1969「〈伝統〉の創造的契機」『現代人の思想 14 伝統と現代』平凡社、pp.13-14。

平川祐弘 2016「佐伯彰一追悼記事」『産経新聞』(平成28年1月11日)。

(2019年11月14日受理)

# On Saeki Shōichi's "Change and Abandonment" in the Field of Literary Criticism

Tohru Ohnuki

## Keywords

Saeki Shōichi, literary criticism, literary tradition, war experience, giving lectures on the history of Japanese literature at an American university, Japan-American relations

During the decade from the late 1960s to the early 1970s, Saeki Shōichi (1922-2016), one of leading literary critics in Japan after World War II, had a decisive "change and abandonment" in the field of literary criticism. First, when Saeki was around 40 years old, his experience of giving lectures on the history of Japanese literature from Man'yōshū to Mishima Yukio at an American university for two years, from 1962 to 1964, greatly transformed his literary view and historical sense. Based on this change, Saeki tried to reconstruct the entire history of Japanese literature from the perspective of "eros" (one of his original literary terms), but he had to give up it in the end. This abandonment compelled him to embark on new research, called autobiographical research, which some count as his most important work. This is seen as a big irony in the history of literary criticism.

This essay begins by demonstrating that Saeki's teaching experience at an American university transformed his view that Japanese literature after the Meiji Restoration is cut off from the predominant Japanese literary heritage. Then it moves on to discussing the reason why Saeki did not succeed in rewriting the history of Japanese literature from the perspective of eros. This will show how Saeki began his autobiographical research.